

A detailed white line drawing of a three-masted sailing ship, likely a clipper, is centered on a dark, textured background. The ship is shown from a side-on perspective, sailing towards the right. Its complex rigging, including numerous ropes and pulleys, is meticulously drawn. The ship's hull is visible at the bottom, and the water is represented by simple, wavy lines. The overall style is that of a classic book cover illustration.

庄野英二全集

3

偕成社



庄野英二全集 第三卷

印刷 昭和五十四年六月二十五日

発行 昭和五十四年七月十日

著者 庄野英二 しやうの えいじ

発行者 今村 廣

発行所 株式会社 偕成社

〒一六二 振替 東京五一―三三二番
東京都新宿区市ヶ谷砂土原町三の五

電話 東京(〇三)二六〇―三三二一代

印刷 新興印刷製本株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

定価 二五〇〇円

乱丁本・落丁本はおとりかえいたしません。

庄野英二全集 第三卷

装幀 カット
装幀 協力

庄野 英二
山高 登

目

次

うみがめ丸漂流記	9
----------	---

ごちそう島漂流記	63
----------	----

1	大しけ	65
2	ふしぎな海に流されて	71
3	八人のひげの男	77
4	板にのせてはこぼれる	82
5	都についてみれば	92
6	ごちそうまんぶく	102
7	にぎやかなお祭り	106
8	ランの花の女の子	109
9	南京へ南京へ	116

10	大酒もり	124
11	おみやげどつきり	128
12	権八 ごんぱち のほら話	136

ボタン島漂流記

1	ながされる松栄丸 しょうえいまる	143
2	きられた帆柱 はばしら	149
3	なっとうのあじ	158
4	ここはどここの島じゃ	163
5	丸木舟 まるきぶね のしゅうげき	173
6	どれいにされた十五人	178
7	じょうるり通信	183
8	大きな船のいる村へ	191
9	しんぼうがだいいち	197

10	ちからをあわせ、ちえをしれば	208
11	長吉 ちやうきち のけが	214
12	さいごのしばい	220
13	長さ八間 けん の船	225

アルファベット群島 229

	はじめに	231
A	欲 ほ 張り島 <i>Avarice Island</i>	237
B	よい匂 にお いの島 <i>Balm Island</i>	245
C	キャンデー島 <i>Candy Island</i>	259
D	ダイヤモンド島 <i>Diamond Island</i>	263
E	象 ぞう 島 <i>Elephant Island</i>	269
F	フオスター島 <i>Foster Island</i>	274
G	大食 おおく い島 <i>Gluttony Island</i>	285

W	V	U	T	S	R	Q	P	O	N	M	L	K	J	I	H
風車島	海賊島	ウクレレ島	トーテムポール島	怠け島	虹の島	せつかち島	ポニー島	オリンピック島	ノスタルジア島	モーツァルト島	ライオン島	たこあげ島	ジャンボリー島	アイスクリーム島	はらぺこ島
<i>Windmill Island</i>	<i>Viking Island</i>	<i>Ukulele Island</i>	<i>Totempole Island</i>	<i>Sloth Island</i>	<i>Rainbow Island</i>	<i>Quick Island</i>	<i>Pony Island</i>	<i>Olympic Island</i>	<i>Nostalgia Island</i>	<i>Mozart Island</i>	<i>Lion Island</i>	<i>Kite Island</i>	<i>Jamboree Island</i>	<i>Iccream Island</i>	<i>Hungry Island</i>
423	409	401	387	380	376	373	362	355	346	341	332	324	310	303	297

X	クリスマス島	<i>X'mas Island</i>	425
Y	ヨット島	<i>Yacht Island</i>	428
Z	シマウマ島	<i>Zebra Island</i>	432

あとがき		436
庄野英二全集 第三卷 解題	戸塚 惠三	438
庄野英二覚え書	前川 康男	442

うみがめ丸漂流記



南紀串本のりょうしは、秋から冬にかけて、イカの夜づりがしごとでありました。

田浦由松は、その日も夕がたになって、はまへでかけてゆきました。

船をおろすてつだいに、つまのスエもいっしょに家をめました。

家の近くであそんでいたひとりむすめのツル子が、父母のすがたをみつけると、走ってきて母と手をつなぎました。父をはままでおくりにくくのがまい日のきまりとなっておりました。昭和三十年十一月二十日のことです。

はまだは、近所の音吉と義一とが、めいめいの船をおろしかけているところでした。

由松はいそいでそれをつだい、それからじぶんの持ち船、うみがめ丸も、てつだってもらって海におろしました。

うみがめ丸は、やき玉エンジンつきの一トンのつり船です。

火をつけてエンジンを動かしかけてから、由松はオーバーのポケットからパンのふくろをとりだしました。つまのスエが夜食のために、アンパンを五ついれてくれてありました。

由松はアンパンを二つつかんで、

「ツル子、これをやろう。」

と、手をさしました。

「いないよ、おとうちゃん。沖でたべるといいのや。」

といって、手をふりました。

エンジンが、ボンボンボンボンちようしょく、音をたてはじめました。

由松は、アンパンをふくろにいれて、オーバーのポケットにしまいこみました。

音吉と義一の船をおうように、うみがめ丸も走りだしました。

父を見おくってから、スエとツル子は家にむかいました。父があすの朝帰ってくるときには、ツル子はもう学校へでかけてしまっているのです。

三人の船はみさき（串本の人たちは潮岬のことを、ふつう、みさきとよんでいます）の沖へついでから、いつものきまりでめいめいわかれて、いかりをおろし、イカつりにかかりました。

ポケットにアンパンがはいっていますが、由松は、たべるとねむくなるので、たべないでタバコばかりをすっていました。

九時ごろになって、風がふきはじめ、波がでて、さっぱりつれなくなっていました。それまでのえものは、イカが四十ぴきだけです。

いっそんなことならば、今夜はもうあきらめて、家に帰ろうかと思いました。しかし、いまごろ帰っても、はまへ船をひきあげるのにだれにもつだってもらうことができません。

それでしかたなく、みさきのかげへいって、いかりをおろして夜をあかすことにしました。いままでにも、こういうことはたびたびありました。

みさきの下で、いかりをおろしてじっとしておりましたが、風はいっこうにしずまりそうにもあり

ません。そのときの風は、このあたりのりょうしがコチとよんでいる北北東の風でありました。

音吉と義一ぎいちの船も風をよけに、みさきの下にきておりました。

およそ七時間くらいはなんともなかったのですが、そのうちに、風のためにいかりが、じりじりひきずられはじめているのに気がつきました。

海はシケはじめておりました。

「これはいけない。エンジンをいれよう。」

由松よしちはくらやみの中で、ひとりごとをいって、エンジンに火をつけようと思いました。

ボンボンボンボンボン……

エンジンが音をたてはじめるまでに五分間ほどかかりました。そのあいだにも、音吉や義一の船と五、六百メートルもはなれてしまいました。

やっとエンジンがかかったので、風のとよくない場所をみつけようと、かじをとり、船のむきをかえようと思いました。

そのとき、がっぷりと、ななめ前からつづけさまに三かい大波をくらってしまい、ミヨシ（船のさきのつぎでた部分）が波の中につっこんでしまいました。

船の中に、どっと水がながれこみました。

由松は、音吉や義一に合図をしようとしたましたが、かいちゅう電燈をもっていないません。それでバッテリーからおろした集魚燈しゅうぎょとうのランプをもちあげて、それを左右にふりました。

ところが、音吉も義一も、信号には気がつかないらしく、こたえの光も見えません。

そのうちに、くる波もくる波も、みんな船の中にながれこんで、みるみる、エンジンの七ぶんめあたりのところまで、アカでつかってしまいました。アカというのは、りょうしのことばで海水のことをいうのです。

つった四十ぴきのイカも、しらぬ間に波でながしてしまっていました。

こんなに水づかりになつては、もうエンジンもやくにはたちません。由松は重たいバッテリーを海にほうりこんでしまいました。船の重みをすこしでもへらしてやろうと考えたからであります。

夜がふけるとともに、大シケになってしまっていました。

由松は石油のあきかんで、アカのくみだしにかかりました。アカはくんでもくんでもへりません。それどころか、すこしでもゆだんをすると、まえよりもいっそうはいりこんできます。それでやすむ間もなく、はたらきつづけました。

十一月二十一日、二日め

いつの間にか、夜があけておりました。

船はいま、どのあたりにいるのだろうかと思つて、陸のほうをながめてみました。

市江崎の沖二キロくらいの位置にすることがわかりました。りょうしは山や森のかたちや、海ぎわのかけや、すなはまを見ただけで、そこがどこであるかということはよくわかるものなのです。これはながい間、海の上ではたらいにいるので、陸地のとくちょうを頭の中にのみこんでしまっているからであります。